

新晃工業

右肩上がりのDC需要

中期経営計画
の重点取り組み

水AHUの競争優位・向上図る

空調機器の総合メーカー、新晃工業(社長 末永聡氏、本社・大阪市北区)は、2021年度を起点とする4カ年中期経営計画「move・2025」の重点取組項目として水AHU(エアハンドリングユニット)の強化、ヒートポンプAHUの強化、工事業業強化、中国

事業強化、技術深耕・品質向上の5つを掲げる。この重点取組項目の中で水AHU強化の柱のひとつとなるのがデータセンター(DC)市場へのAHU注力だ。データセンターでは、サーバーの高性能化に伴い、1台当たりの発熱量が増加、これによって大容量でさらに

性能の高い空調機器へのニーズが拡大するとし、同社ではAHUの成長分野として今後、データセンター市場のさらなる開拓に力を入れる考え。市場調査会社の集計によると、地方に立地するDCは、サーバールームの面積比で15%程度であり、大半が関東(61・1

%、関西24・1%)に集中する。中でも千葉・印西市は外資系DCが林立する一大集積地としてIT業界ではよく知られる。同市では総合住宅メーカーが一昨年国内最大のDC開発プロジェクトに着手しているが、今年4月、2025年までに14棟、総延床面積約33万平方メートルの開発を進めることを明らかにした。

DCの需要は右肩上がり。コロナ禍でEC(電子商取引)が急拡大し、企業のDX進展が必要拡大に拍車をかける。営業統括本部東京支社アウトサイドセールスマネージャーの玉川厚志氏は「関東圏では印西、多摩地区に大規模DCが集中立地している。新築で千数物件が進行中と聞くが、今後さらに新規プロジェクトが進んでくる。我々としても受注獲得に向け、しっかりと提案していきたい」と力を込める。

新晃工業におけるDC空調ソリューションとしては、サーバーエアハンド型、DEED型、DEIE型、サーバーウォールD EIMW型などが挙げられる。サーバーエアハンドはアンダーフロアを利用して床面に設置したグレーチング(格子状の蓋)を通じて室内に冷気を提供する仕組み。DEED型は国産汎用部品で機器を構成し、短納期で長寿命を実現しており、DEIE型は小型・省エネ設計のECモータを搭載している。両機種ともダクトの延長・分岐が容易な高静圧対応。サーバーウォールは間仕切壁を介して室内に冷気を供給するもので、小規模のサーバールームから対応可能という。モジュール設置により柔軟な設計と省スペースを実現しており、将来のレイアウト変更やサーバーの増設にもフレキシブルに対応できる。玉川マネージャーは「サーバーエアハンドが主力だが、今後、小規模の都市型DCも拡大していくと見ており、それらの分野ではサーバーウォールが適する」と話す。拡大の一途をたどるDC需要。新晃工業の提案が一層注目されそう

だ。